

台湾の祭祀圏と信者ネットワーク

—台北市の寺廟を事例に—

上水流久彦

はじめに

祭祀圏とは、共同的に祭りをを行う人々の居住地域（岡田、1938：3）である。祭祀圏は、台湾漢人の信仰活動の地理的範囲を捉えるための重要な分析概念であった。そこで、本稿では祭祀圏に関する議論を参照して、これまで十分に取り上げられなかった都市の寺廟の祭祀圏を問題にする。

本稿で扱う寺廟は、「玉山の寺廟」と称されるほど地域との結びつきが強い台北市玉山の蓬萊寺である¹。このような特定地域の寺廟は、漢人研究では主に「村廟」として論じられてきた。村廟は、単姓村での宗廟（祖先祭祀の宗教施設）とほぼ同様な役割を担い、「地縁集団たる村落の中心（福武、1976：429）」として理解されてきた。村公所が寺廟に置かれていたことや村廟の祭典費用が村費や村民の寄付によって賄われていたためである。また祭典終了後には祭典参加者がともに食事をするのであるが、「そこに食卓の醸し出す親愛感によって村民の連帯意識が強められた」（福武、1976：429）からである。

このように村廟はある一定の地域に居住する人々が随意に出入り可能で、共食を含めて共同で祭祀する場であり、信仰上の統合的象徴で、村落を統合する機能を持つと分析されてきた（台湾漢人の研究としては、石田1985、Pasternak 1972、施1973等）。ここで述べられる統合や結合とは、村民が村廟の共同作業を通じて互いに面接的な関係を持ち、親密感を持つということや、団結心の養成、村落秩序の保持への寄与などを意味する。

加えて、漢人の村廟研究の多くには、村という一定地域に居住する人々が参拝する寺廟の存在を自明視し、その機能を探っていく傾向がある。しかし、近年その関わりを問い直す議論がある。地域的単位と信仰の関わりそのもの

を疑う立場から寺廟の地域社会での位置づけを再考するものである。この立場から寺廟を論じた三尾/木内はこれまでの村廟研究の分析を通じて、それらにある暗黙の前提があることを指摘する（木内、1988：87）。その前提とは明確な外縁がある地域的単位があり、参加者の資格がその単位への帰属に限定されることである。木内は、「誰がどのようなかたちで係わるのか」を精査することなくそれらの研究ではその前提が結論づけられているとし、「村廟」の概念を問い直している。その結果、村廟の概念に対して慎重な態度を示し、村廟とは廟が発展していく過程でその廟の祭祀圏の境界と村の境界が偶然に重なったものではないかと述べる。

三尾は祭祀圏の再検討をするなかで、漢人社会の祭祀の特徴は地域的単位を基盤とするのではなく、その単位はあくまでも個人であり、個人による祭祀への参加選択の集まりがどのように地域的領域で広がっているかを仔細に検討すべきであると主張する（三尾、1991：128）。彼女の指摘から伺えることは、個々人の実際の行動よりも地域単位という組織の枠の論理を優先させる危うさである。三尾の議論は「ある地域の寺廟」という概念を参拝者の行動から捉え直すものであり、この点は未成の台湾北部の客家村落の寺廟への寄付資料も実証するように台湾の寺廟を安易に地域的単位の帰属と結びつけて論じることはできない²。

この点は蓬莱寺も同様である。玉山の住人全てが、かつ彼らだけが当廟に参拝するわけではない。そのため、地域的単位と信仰の関わりを参加者の行動から問うと、蓬莱寺は「玉山の寺廟」とはならない。むしろ、「玉山の寺廟」とは人々の意識のレベルに基づくものである。

未成は、祭祀圏という用語が分析概念としての有効性を失っていることから、信仰に関わる範囲と領域を総称して、「信仰圏域」という用語を設定している。未成のその用語は、信者圏、信徒圏、祭祀域という下位区分からなる。寺廟には寺廟に参拝するだけの者と、その管理運営等に関わるなど寺廟の活動に定期的、積極的に関わる者とが存在するが、未成の議論を大まかに述べれば、前者と後者を併せたものが信者圏であり、後者の範囲を示すものが信徒圏である。これら二つの信仰圏域は寺廟参加者の行動を導き出すものであり、流動性が高いものである。他方、祭祀域とは「所与の祭りに行うに際し

て、ある種の求心力ないしは凝集力を持つと意識され、かつ地域的結合の象徴となるような範囲」であり、「人々の意識を中心とした、いわば内面的な概念」であるため、「必ずしもその「領域」内のすべての住民を包含するとは限らない」（未成、1991：46-49）概念である。

以上三つの区分は、寺廟参与への質的な違いと、意識と行動とを区別した点で漢人の信仰に関わる範囲と領域を祭祀圏という概念よりも適切に分析することを可能にするとして筆者は考える。第2節で詳述するように蓬萊寺の参与者の範囲を論じる場合、信者と信徒の間には明確な区分があるが、従来の祭祀圏ではそのような違いを捉えることができないからである。さらに交通網が発達し、人々の行動範囲が広がった現代の台湾ではそれぞれ祭祀圏＝台湾全体という寺廟－蓬萊寺もそうであるが－が多数となる可能性は高く、分析概念そのものとして意味をなさなくなるおそれもある。

信仰圏域の分析概念は個人の意識と行動の区別の点でも有用である。蓬萊寺は玉山の寺廟と語られるにも関わらず、参拝に行かない玉山居住者も多かった。このようなズレを把握するためにも「圏」と「域」を分けて、信仰の範囲と領域を理解することは必要であろう³。そして、筆者が述べる「玉山の寺廟」とは祭祀域、つまり玉山に居住する人々の意識に基づいた意味での表現である。筆者が知る限りでも誰でも参拝できる寺廟が玉山には20以上存在するが、「玉山の」という言葉がつく寺廟は蓬萊寺と別のもうひとつの寺廟しか存在しなかった。

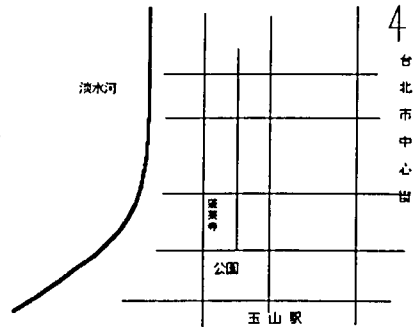
本稿では、祭祀域のレベルで「玉山の寺廟」と捉えられる蓬萊寺を事例とし、当該寺廟への信者・信徒の関わりを成員資格や実際の参拝の側面から詳述する⁴。この作業を通じて、「圏」という地理的範囲の枠組みから寺廟と信者らの関わりを捉えることを批判的に検証する。

一．調査地－台北市玉山

筆者が調査のため居住した玉山地区は台北市の西南部に位置し、小売業に従事する者が多い。調査当時の1995年の玉山の人口は約20万で、面積は約8平方キロメートルである。そして、玉山は三百年ほど前に漢人が本格的に開拓した、台北発祥の地である。開拓の際、中国大陸の三つの地域からの劉、

孔、羅の三つの姓の移民が重要な役割を担った。三つの地域とは、福建泉州の惠安県、晋江県、南安県で、泉州から玉山に移民した漢人の大半は、この三県の出身者であった。彼ら及びその子孫は玉山で「三邑人」と称される⁵。

漢人開拓以後の玉山の歴史は大きく三つに区分することができる。第一期は、開拓当初（18世紀後半）から清朝咸豊年間（19世紀半ば）までである。この時期、玉山は政治的にも経済的にも台湾北部の要地としての体裁を整え、台湾を代



表する地域としての名声を獲得した。台湾北部を管轄とする清朝の行政機関である「都司營」や軍事機関である「水師游撃」が玉山に設置され、北部を代表する行政官（「縣丞」）の役職名にも玉山の当時の地名である「瓔譚（えいか）」が用いられるようになった。また、玉山は台湾北部の各地域と中国大陸の泉州や北部とを結ぶ貿易港として栄え、台湾全土で最も栄えた地域のひとつとして名を馳せた。物資の集散地である玉山には三つの主要な埠頭があったが、それらの埠頭をそれぞれ支配したのが、劉、孔、羅の三姓の者であった。各姓の者は、姓を同じくするだけで同一宗族ではなかったが、玉山で仕事を見つけるうえで同姓であることは重要な要素であった。

第二期は清朝の同治年間（19世紀後半）から日本の植民地支配終了までである。この時期、玉山以外の地域が急速に発展し、台北における玉山の地位は低下する。衰退の決定的要因は、埠頭付近における土砂の堆積であった。そのため埠頭にジャンク等の貿易船が入りにくくなり、玉山は貿易港としての役割を担えなくなり、街は徐々に衰退しはじめる。政治的には、台北府城が玉山の東側に隣接する地域に設けられ、玉山は政治的な枢要性も失いつつあった。玉山の衰退にさらに拍車をかけたのが、日本の植民地支配である。日本の植民地政府は台北府城の内部（城内）に行政機関を置き、そこを主に内地人の居住地とし、城内の開発に力を注いだ。一方、玉山の一区画は、内

地人によって遊郭として整備された⁶。それでも、第二期の玉山は、漢人が主に居住する地区のなかでは台北市で賑わう街であった。ちなみに墾闢は植民地政府によって1920年代後半に「玉山」と変えられた。

第三期にあたる日本植民地支配以後の玉山の没落は、第二期に比べてもさらに激しかった。最大の原因は、都市を形作る政治的・経済的中心施設の他地区への移設である。商業地区は、戦後玉山やその周辺から、近代的なビル群の林立する新興地区に移った。また、行政機関等も東側に集中していく。このように台北市が東へ東へと大きく発展していくなか、市の西側にある玉山はその発展の恩恵を被ることはなかった。

玉山の没落は人口変動からもうかがえる。その特徴は貧困層の流入と富裕・中産層の流出である。都市化はその過程で階層の別による棲み分けを生み出すが、台北市の都市化において、玉山は低所得者層を受け入れる地区となった。市街地のなかで玉山が最も住居費が安く、台湾南部から来る人々はまず玉山に住んだ。裕福になった者はよりよい居住環境を求めて玉山を出るのである。玉山の住人のなかには「この辺りに住んでいる人はここに住み慣れた老人か、離れたくても離れられない貧しい人しかいないよ」と嘆く者も多い。そして、筆者が接した地元住人の多くは、周囲の変化から玉山の住民の多数が見知らぬ人々に占められていることや、玉山が没落地域として語られることに不安や不満を感じていた。現在台北で聞く玉山の評判は、おおむね「汚く危険で、没落した場所。貧しい人や老人が多い」というものである。

玉山の台北における相対的な地位の低下は、三邑人や三姓人にも影響を及ぼした。特に経済的には、「劉、孔、羅の三姓でなければ玉山で仕事を見つけることはできない」とかつて言われたようなことはなく、この三姓が他姓を凌ぐ勢力ではもはやない。それは、数の上でも同様である。元来玉山文化の中心的担い手であった三邑人は、現在玉山でマイノリティとなっている⁷。

二. 蓬萊寺の祭祀活動と管理運営

(1) 祭祀活動にみる成員資格と関与

蓬萊寺は観音菩薩を主神とする仏教寺院で、その主神観音菩薩は今日にいたるまで台湾で広く信仰を集めている神仏である。境内には誰でも自由に

入りでき、日頃は私的な信者集団が各々誦経している。仏教寺院とはいえ、蓬萊寺は媽祖や閩帝などの非仏教系の神明も多く祭っている。

蓬萊寺は三邑人が費用を集め、1750年前後に創建した台北でも最も古い寺廟のひとつである。そのため、当該寺廟は三邑人の寺とされ、1910年頃に日本の植民地政府の指導を受けるまで、三邑人でなければ参拝寄付することができなかったという。また旧暦七月十五日に行う盂蘭盆会にも、その年までは玉山居住の三邑人かつ三姓人でなければ、参加は許されなかった。このように三邑人かつ三姓人しか元来は関われなかった点で蓬萊寺は閉鎖的な寺廟であった⁸。

蓬萊寺の主たる行事には、観音菩薩の生誕の旧暦二月十九日や得道した六月十九日、入滅した九月十九日の儀式があり、「補運（厄払い）」のために多くの信者が蓬萊寺に参拝する。この他、旧暦の一日と十五日に定例の祭典がある。これらの祭典の日には、三邑人と限定されることなく台湾北部を主として全土から多くの信者が参拝に来る。旧正月の一日には約十万人の出入があるとも言われる。なかでも最も賑やかな祭典は、旧暦七月の盂蘭盆会である。特に旧暦七月十三、十四、十五日の三日間は盛大である。この三日間も他の祭典同様、各地から多くの信者が参拝する。この点で信者圏は台湾全土に近いものがある。だが、当該祭典の重要な構成要素である「放水燈行列」と「普施（施餓鬼会）」への参加者は厳密に限定される。

「放水燈」とは、川や海などにいる浮かべられない靈魂を施餓鬼に招くための儀式であり、水辺に行き灯籠を流す。蓬萊寺の「放水燈」への参加は九つの団体に限られ、さらに十五日の「普施」で蓬萊寺に正式に供え物ができるのもそれらの団体のみである。これら九つの団体は、南安県出身者の子孫からなる媽祖を祭祀する神明会（祭祀組織）、惠安県出身者の子孫からなる媽祖を祭祀する神明会、晋江県出身者の子孫からなる媽祖を祭祀する神明会、紙銭の金銀紙を作る同業者の会、蓬萊寺の前にあった料理屋の同業団体とそれ以外の商いをしている人からなる同業団体、中国本土の北部と貿易をしていた玉山地区の同業者の子孫からなる団体、玉山地区で豚肉を売っている団体、玉山地区が貿易港として栄えた当時に当該地で最も繁栄した一族の子孫たちからなる団体である。なかでも三つの神明会と紙銭の同業団体の四つは、そ

れぞれ「主醮」、「主壇」、「主普」、「主事」と称されて孟蘭盆会の祭典の中心的役割を果たしている。

主醮、主壇、主普である各々の神明会は媽祖の祭祀を目的とする集まりであるが、成員権を考えれば、実質的には同郷団体の一種である。例えば、晋江県出身者の子孫からなる会の成員権は原則として権利保持者の息子ひとりにも譲渡される。したがって、蓬萊寺の孟蘭盆絵の中樞である儀式への参与は三邑人に握られており、そのため蓬萊寺のこの祭典はかなり閉鎖的であると言えよう。

もちろん、各同業者団体を通じて、三邑人でもなく三姓人でもない人々が放水燈行列及び普施に参加できるため、祭典そのものが三邑人や三姓人以外に完全に閉ざされていない。さらに蓬萊寺の他の祭典について言えば、その閉鎖性は全く感じられない。海外からも含めて多くの観光客の来観を歓迎していることを考慮すれば、台湾でも最も開放的な寺廟のひとつと言ってもよい。だが、当該祭典の中心的儀式に関してはその開放性はない。その点は他の玉山地区の寺廟が祭典の主権者を占いで選び、血縁や地縁によって制限していないことと比べれば顕著な違いである。また現在の管理運営組織の理事には劉姓や孔姓の者が多く、現在の理事長は劉姓の三邑人である。

したがって、蓬萊寺は玉山が台湾で栄華を誇った時期の支配層である三邑人の色合いが強く残っている場であり、玉山の全盛期の歴史を現在に伝え、容易にそれを想起させることが可能な空間となっている。そして、台湾全土に名前が知れ渡っているという点で、蓬萊寺という寺廟が彼らの威信を示す大きな資源となっていることも事実である。その威信を支えているのが、靈験のあらたかさである。多いときには一日に万人単位で信者が蓬萊寺を訪ねることや、信者の寄進がここ数年、年間四千万円⁹ほどもあることが、それを物語っている。

(2) 管理組織等のメンバーシップと関与

蓬萊寺は一般的な参拝では広く開かれた寺廟である。信者は台湾全域から来るといっても過言ではない。しかし、信徒以上はそれとは異なる。

1960年代前半まで管理委員会が、その後改組し財団法人が蓬萊寺を管理し

てきた¹⁰。現在、董事（日本の理事にはほぼ相当）会と監事（日本の監査にはほぼ相当）会があり、前者は董事十五名によって構成される。さらに常務董事を四名、廟の最高管理責任者である董事長を一名選ぶ。監事会は五名で構成され、監事による互選で常務監事を一名選出する。これらの役職はすべて名誉職である。

管理運営は実際董監事会がするが、最高権力機構は信徒大会で、そこで信徒のなかから話し合いで董監事を選出する。蓬萊寺に関して述べる信徒とは寺廟が政府機関に提出する書類に「信徒」として登録されている者であり、一般には信仰が非常に厚い信者が選ばれるという。信徒は信徒大会で寺廟に関する様々な案件に関して評決する権利を有している。

信徒になる条件について明確な基準は無い。現董事長は、寄付金額による基準を否定し¹¹、信仰心を前提条件に三邑人とのつながりがあるか、あるいは寺廟への貢献がある者が信徒になるのだと言う。だが、「つながり」や「貢献」の内容は規定されていない。

管理組織成員の条件については、蓬萊寺の熱心な信者の一人が、「もちろん熱心な信者ではないといけないけれど、それだけではだめでね。この廟の幹部成員はみんな偉い人で、社会的地位があつてお金がある人がなります。それにやはり人望がなければだめですよ」と答えた。さらに現董事長も以下のように話す。

「董事や監事になるには三邑人である必要はありませんが、玉山で声望がある人でなければなりません。蓬萊寺に貢献がある人で声望があり、欠点のない人です。玉山の人であれば、どんな人かはすぐわかります。やはり家柄や人格がなければだめです。玉山に住んでいなくてもこの市に住んでいればかまいません。董監事になるには第一に信仰があること、第二に縁故か貢献があることです。貢献というのは例えば建物の増改築に寄付金をたくさん出すとか、実際に増改築を引き受けてくれるとか、または蓬萊寺の改革や改善に力を尽くすとか、そのようなことです。最近、新しい建物のデザインを奉仕でしてくれた方がいましたが、そのような方が本廟に貢献があつた方となるわけです。そして縁故とは玉山との関係です」¹²。

この説明が示すように董監事の条件は信仰が篤いこと、人格者であることや蓬萊寺への貢献、玉山とのつながり等の点が重要である。これは董監事が信徒から選ばれることを考えれば当然と言えよう。それらに加えて強調されることは玉山で名望があることである。だが、これらの条件も客観的な基準ではない。

そこで、実際にどのような人物が管理委員になっているのかを見ていこう。1980年代前半の董監事は次のようになっている（表1はその一覧表）。当時の董事長は孔姓の者（1）であり、三邑人である。彼は玉山を基盤とする金融機関の理事長をしていた。家は先祖代々の資産家である。彼は財団法人化以後から当時まで董事長の職についていた。財団法人法によれば董事長の連続三選は認められていない。しかしながら、彼は連続七選しており、その規定は蓬萊寺では実質的に意味を持っていない。

次に常務董事である。その役職には、張姓、陳姓、許姓、劉姓の四人が就いていた。張姓の者（2）は玉山に戦前から住む開業医である。陳姓の者（3）も旧来の住人で、玉山でも有数の資産家である。許姓の者（4）は日本時代には父親が貴族院議員であり蓬萊寺の董事を務めていた。劉姓の者（5）は玉山に居住しているが、元来は玉山の人ではない。彼は会社経営者で当時市議会議員でもあった。その財は豊富である。また、台北市の劉姓同姓団体の董事長を務める人物である。もうひとつの重要な職位である常務監事には劉姓の者（6）が就任していた。彼は玉山の名家の出であり、日本時代に蓬萊寺の大改修の時には彼の一族が主体となってそれを推進した。また蓬萊寺の財団法人化は彼が中心になり進めた。

残る管理組織成員は董事十人と監事四人である。姓で分類すれば、董事には劉姓が四名、羅、孔、朱、洪、張、魏姓が各一名である。監事には莊、王、連、楊姓が各一名である。これら董監事のなかで玉山出身者は女性二名（14・18）を除いた十二人である。そのうち、十一名が会社を経営するか、当該地区を基盤とする金融機関の理事や理事長の役職を経験している。残る一名（10）は玉山が海運で繁栄した頃、最も裕福だった一族の子孫である。女性のうち一人（18）は、その夫が台湾でも有名な製菓会社の社長であり、以前蓬萊寺の董事の職についていた。

1980年代前半蓬萊寺管理組織成員一覽表

No	役職	姓	出身	居住地	職業等	詳	その他
1	董事長	孔	玉山(三)	玉山	金融機関長・珈琲	×	
2	常務董事	張	玉山(三)	玉山	開業医	○	董事長と同窓
3	常務董事	陳	玉山(三)	玉山	資産家・金融機関理事	○	
4	常務董事	許	玉山外	玉山外	会社経営者・父前董事	○	
5	常務董事	劉	玉山外	玉山	会社経営者・市議会議員	○	劉姓宗親会役員・①と対立あり
6	常務監事	劉	玉山(三)	玉山	公務員・玉山名家	○	劉姓宗親会役員
7	董 事	劉	玉山(三)	玉山	会社経営者	○	劉姓宗親会役員
8	董 事	劉	玉山(三)	玉山外	金融機関理事	○	劉姓宗親会役員
9	董 事	劉	玉山	玉山外	金融機関理事	×	理事15年間
10	董 事	魏	玉山(三)	玉山	玉山名家(日本時代繁栄)	○	
11	董 事	劉	玉山(三)	玉山	金融機関理事・会社経営	○	劉姓宗親会役員
12	董 事	孔	玉山(三)	玉山	金融機関理事	×	①董事長の息子
13	董 事	羅	玉山(三)	玉山	会社経営者	○	
14	董 事	朱	玉山外	玉山外	無職	○	夫が董事長と同窓
15	董 事	洪	玉山	玉山	会社経営者	○	
16	董 事	張	玉山(三)	玉山外	会社経営者	○	
17	監 事	莊	玉山	玉山外	会社経営者	○	
18	監 事	王	玉山外	玉山外	製菓会社社長夫人・夫前董	○	
19	監 事	連	玉山(三)	玉山	金融機関理事	○	
20	監 事	楊	玉山	玉山外	会社経営者	○	

<表1>

- * 1 「後半」の項目は、1980年代後半に再選されたか否かを示す。
- * 2 「居住地」の(三)は三邑人であることを表す。
- * 3 (14)と(18)のみ女性である。
- * 4 年齢は(12)を除いて概ね50歳から70歳である。(12)は40歳前後。
- * 5 「金融機関」とは玉山に基盤をおくもので、孔姓の者がその中樞を担ってきた。発足は日本植民地支配終了直後。

このように見てくると、董監事のほとんどが玉山の人であって三邑人の者も多い。また姓でみれば、三姓人（劉、孔、羅）が九名で委員の約半数を占める。なかでも劉姓は単独で約四分の一を占めている。職業も、当該地区を代表する金融機関の理事長・理事に医師、それに会社経営者及び議員と、多くが人々の称賛する職である。そのような職についていない男性の場合には、台湾や玉山の名家出身者である。これらを見る限り、董監事になるには三邑人で、社会的地位や経済力のある人がなっており、「玉山での名望」がある。玉山以外に住む人物は先に述べた設計師のように蓬萊寺の活動に貢献があったとされる人々で、具体的には設計士に加え、高級官僚や台湾全土に知名度を持つ企業の経営者、社会的地位の高い職業の全国レベルの同業団体の会長の婦人らが多い¹³。政治家は三邑人かつ三姓人の人物に数人いるだけで、他地域出身の政治家は五十年前に一人いたのみである。

董監事に三邑人や三姓人の比率が高いことは、当該期のみの特徴ではない。蓬萊寺の財団法人化以降の董監事では三邑人と三姓人の比率は、76%と45%である。玉山には台北を本籍とする者が35%にも満たず、三邑人の割合はこれよりも低い¹⁴、この点を踏まえると蓬萊寺では管理組織成員に三邑人が占める割合が非常に高い¹⁵。以上のことから蓬萊寺管理組織の役員集めについて二点言えよう。ひとつは蓬萊寺が玉山という地域よりも三邑人など「瓔譚」という歴史を色濃く反映していること、もうひとつは、三邑人ではない人物が蓬萊寺で董監事に選ばれる場合、台北市や台湾レベルの著名な人物が多いことである。

三. 蓬萊寺の管理組織成員の選出基準

本節では上記のような選出がなぜ可能であるかを考えるために、蓬萊寺の成員選びの基準を具体的事例に基づいてさらに細かく検証してみたい。蓬萊寺では董監事に選ばれる条件について二つの対立する見解（信仰、貢献、名望 vs 有力委員との関係）があるが、1980年代前半と後半の二つの時期について蓬萊寺の董監事が選ばれる過程の分析を通じて、有力委員との関係が選出の重要な要因であることを明らかにする。

ある前董事は董監事の選出方法について、「信仰が厚く貢献があって声望

がある人というのは建前ですよ。実際は董事長の意向によって決まります。特に以前はそれがひどかった。董事長の言うことを聞く人を選ぶわけですよ。董事長に都合がいい人ばかりを集めるわけですよ」と語る。この前董事の説明によると、董監事会の成員が董事長の意志によって大きく左右される印象を受ける。玉山との関係がある人が好まれるとは言え、「信仰」と「貢献」、そして「名望」で選ぶとする説明とは大きく異なる。前董事が述べるように董監事を選ぶとすれば、それは董事長の意向の優先であろうし、董事長らの説明で選ぶとすれば、それは寺廟の論理を優先させた選択である。個人の意向と寺廟の論理どちらがより優先されて董監事は選ばれているのか、まずは董事長らの説明を手がかりにみてみよう。

董事長自ら語るように「玉山での名望」は必要条件ではない。その条件が満たされない人は「信仰心」や「貢献」によって選出されることになるからである。だが、その二つは「玉山での名望」以上に選出基準としては問題が多いことは前節で既述した。曖昧で、客観的でないぶん、選出基準として「信仰心」や「貢献」は選出側にとって操作性の高いものとなる。

それでは、社会的地位や経済力が董監事選出の決定的基準となっているのだろうか。当時董事の任にあった劉姓の者は、自分が董事になった理由について、「私は元々玉山の出身で、第二次世界大戦後はここで店をしていました。商売もうまくいっていましたので、董事長が理事長をしていた金融機関にお金を預けに行っていたわけですよ。そこで孔董事長と知り合いになったわけです。そのうちにね、私の商売がうまくいっていますから、彼にその金融機関の役員になるように誘われて、さらに廟の役員に入れてもらったわけですよ。私が三邑人で、劉姓であることは全く関係ないとは言えませんが、そんなに重要なこととは思いませんよ」と述べる。彼の説明によれば、董事になったのは董事長との関係によることが大きかったようである。

前節で紹介した1980年代前半の董監事のなかで、無職で玉山とも関係がない女性(14)がいる。彼女の董事選出の理由として、彼女の「信仰のあつさ」も慮外できないが、同程度の信仰心の女性信者であれば他に何名もいることから、その理由だけでは特定されまい。では、何であるのか。他の女性信者と彼女が最も異なる点は彼女の夫(非三邑人)の人間関係である。彼女の夫

は医学会の名士で、孔董事長（1）とは旧制中学の同期生である。某董事によると両者の関係はとても親密であった。つまり、女性董事（14）は、彼女の夫を媒介にして蓬莱寺の有力董事と結びついていたのである。

その他、各董監事と董事長とのつながりの強さで注目される人物として、常務董事の張（2）を挙げることができる。彼も孔董事長（1）の旧制中学の同期生である。また孔董事長が長く理事長を務めていた金融機関の理事経験者は董監事に五名いる。そのなかの一人は、董事長の息子（12）である。以上の七名はいずれも孔董事長（1）と明らかに深い関係にある。加えて、玉山人で商売をしていた者と玉山に基盤を置く金融機関との繋がりを考慮すれば、四名が先に引用した商店経営者のような董事長との繋がりがあったと推察できる。ここに董事長の意志が董監事選択に反映されていた可能性を見いだせる。

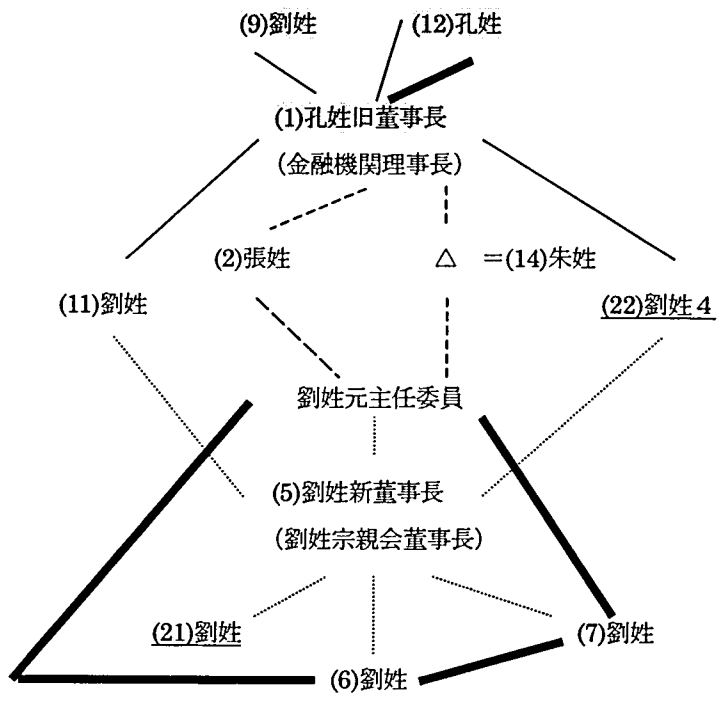
この可能性をさらに検討するために、董事長が交代した1980年代後半の董監事選出を資料として取り上げる。検討するのは、1980年代前半の董監事でありながら、後半の董監事に選ばれなかった人物、孔董事長（1）と関係が深いにも関わらず前半に引き続いて後半も董監事に選ばれた人物、後半から新たに董監事に選ばれた人物たちである（人間関係については図1で整理した）。

1980年代後半の董監事に選ばれなかった者は三名である。その他の董監事は職位に多少の変動があるものと同じである。では、誰が董監事に再選出されなかったのであろうか。

まず董事長である。それは董事長（1）が後半の董監事を選出する一年前に逝去したためである。残りの再選出されなかった二名は董事であった孔姓一人（12）と劉姓一人（9）である。彼らは玉山に縁故のある人物であり、三邑人でもある。また金融機関の幹部成員経験者であり、その社会的地位も十分である。さらに管理運営上の失敗があったとは聞いていない。したがって少なくとも、「信仰」や「玉山での名望」など「決まり文句」の理由から考えると彼らには再選出を拒まれる要因はない。その要因は彼らと劉新董事長（5）との関係にある。この間の事情を知る者のなかには劉新董事長（5）とその二名の感情的対立を指摘する者もいるが¹⁶、劉新董事長（5）との関係に理由を求めることは以下の点からも十分に証明できる。

管理組織成員交代に関わる人間関係

血縁上の紐帯 : **—————** △ : 1980年代後半落選
 宗親会上の紐帯 : _____ : 1980年代後半新選出
 金融機関上の紐帯 : **—————**
 (理監事経験者)
 同窓上の紐帯 : - - - - -



* 劉姓元主任委員は1980年代董監事ではない

< 図 1 >

最初に孔前董事長（11）と新しく就任した劉新董事長（5）との関係を踏まえる必要がある。両者は同じ金融機関の役員をともに長期間務めており、両者の仲は良好であった。ところが、1960年代後半に両者はもめ事（その内容は不明）を起こし、ついには孔（11）が劉（5）以外の人物を金融機関の役員にたて、一期だけであるが劉（5）を役員から追放する騒ぎとなった。それ以来、両者の関係は以前のように良好ではなくなった。つまり、蓬萊寺の董事長の職は孔（11）から彼と不仲な劉（5）に移ったのである。

不仲の劉氏に移った経緯であるが、様々な問題についてワンマンであった孔（11）に対して不満を持つ成員は多かったようである。そこで、三邑人かつ三姓人で、蓬萊寺の管理組織で一大派閥をなしていた劉氏の面々が団結し、そのグループから董事長を選出した。劉姓の管理組織成員は、孔（11）と特に親しかった劉（9）を除いて、みな劉姓の宗親会の幹部であった。そこで当時、その宗親会の董事長であった劉（5）が選ばれた

次に再選出されなかった人物と孔前董事長との関係であるが、前董事の孔姓（12）は孔前董事長（1）の息子であった。もう一人の劉（9）は孔前董事長が、1950年代半ばに金融機関の理事長の任について以後十五年以上にわたって経理（日本の社長に相当）を務めた。これは異例の長さである。

このように、孔前董事長（1）と不仲であった劉董事長（5）は、前董事長と関係が特に親密であったと思われる人物を切った。では、なぜ、孔前董事長と個人的繋がり深かった二名以外の人々は再選出されたのであろうか、代表的な三人の人物は、張（2）、朱（14）、劉（11）である。張（2）は孔前董事長（1）と旧姓中学の同級生の医師であった。朱（14）の夫も孔前董事長（1）と同様の同級生であった。劉（11）は、自ら孔前董事長との関係から董事になったと語った人物である。

彼らに共通する点は1980年代後半の董監事の人事で力を持った劉姓のグループと関係を持っていたことである。その点が最もわかりやすいのは、劉姓（11）である。彼は劉董事長（5）がいる劉姓同姓団体の幹部である。日頃から当該同姓団体の幹部とのつきあいは頻繁であった。また彼はそれらの幹部成員から誘われて同姓団体の祭典の炉主を務めたことがある。このように彼は劉氏（5）とも密接な関係を持っていた。

1980年代後半新選出管理組織成員

No.	役職	姓	出身	居住地	職業等	その他
21	董事	劉	玉山外	玉山外	会社経営	劉姓宗親会役員
22	監事	劉	玉山(三)	玉山	同業団体幹部	劉姓宗親会役員
23	監事	李	玉山	玉山外	会社経営・同業団体幹部	

<表2>

張(2)と朱(14)の事例では、これまでに登場していない別の人物に注目しなければならない。その人物とは、蓬萊寺の管理組織が管理委員会(財団法人化する前)であった時に長年にわたって主任委員(董事長に相当)を務めた劉姓の者である(以下、劉前主任委員)。三邑人である劉前主任委員は以前市長も務めており、その一家は日本占領時代、当市でも指折りの資産家で玉山の名家であった。したがって、彼は孔前董事長と同様に玉山で有力な人物であり、蓬萊寺の有力な人物でもあった¹⁷。もちろん、彼は劉董事長(5)と並んで劉姓の同姓団体の有力幹部成員である。

そして、この人物は孔前董事長(1)と同期生である。この事実は、孔前董事長(1)と同期生ネットワークでつながる張(2)と朱(14)が同様のネットワークで前主任委員ともつながることを意味する。さらに劉前主任委員を介して劉現董事長を含む劉氏宗親会幹部成員でもある蓬萊寺董監事とつながる。

蓬萊寺の董監事会は既述の内容から推察できるように、前董事長であった孔姓の一族と主任委員を務めた劉姓の一族が勢力を持っていた。そして前者が玉山の代表的金融機関を、後者が玉山にある宗親会をそれぞれ基盤にしていた。この点を考えると、孔前董事長に誘われて董監事になった人物が再選出された背景が推測できる。結局のところ、彼らは蓬萊寺董監事会で力を持っていた劉現董事長を含む劉氏の人々と蓬萊寺以外の場で紐帯を持っており、再選出されなかった孔姓や劉姓の人物がそれを持っていなかったのである¹⁸。

この点をさらに検証するため、再選出拒否された者の後にどのような人物が董監事として選ばれたのかを考察してみよう。改選後選ばれたのは、劉姓

が二名と李姓の一名¹⁹である（表2参照）。

劉姓二名のうち、一人は自動二輪の販売会社を経営している。彼は劉姓同姓団体に参加しており、幹部成員も務めたことがある。またもう一人の劉姓の人物は事業には成功しなかったが、ある同業組合の理事長を務めた人物である。彼は先に紹介した孔前董事長（1）の引き立てで董事になったと語る人物の幼なじみであり、玉山人である。さらに彼も同姓団体幹部を務めた経験がある。劉姓の二名はともに同姓団体や地縁を通じて、劉董事長や他の劉姓の人物と多重の関係を持っているのである。このように有力な董監事とのつながりは、蓬萊寺の管理組織の成員を決める要因として大きなものである。

したがって、蓬萊寺では当廟での信仰活動を通じて初めて知った「信仰心が篤く玉山との関係か寺廟に貢献がある」人物をいきなり管理組織成員に選ぶのではない²⁰。それらの条件とはあまり関係なく、社会的地位や経済力のある人物のなかから「管理組織の有力者とのつながりのある」者を選ぶのである²¹。財団法人法では、これら董事長や常務董監事は選挙で選ばれることになっているが、董事長の三選禁止が無意味化していることからわかるように、成員選びの規則は実質的に用をなしていない。長年董監事を務めてきた人物によれば、蓬萊寺では選挙は行われず、事前に決定していることが多い。

結語

台湾村落の地域寺廟を扱った石田は村長・村民代表に選ばれた者が廟の董事にも選出されることを報告しているが（石田、1985：24）、この点において蓬萊寺は地域の有力者をまんべんなく取り込むような組織ではなかった。蓬萊寺の歴史や幹部らの意向によって寺廟への信者・信徒の関わり方が左右されていた。このような蓬萊寺の事例は、寺廟と信者などの関係を「圏」という地理的範囲の観点から分析できない側面があることを示している。

三尾が述べるように、漢人社会の祭祀の特徴は地域的単位を基盤とするのではなく、その単位はあくまでも個人であり、個人による祭祀への参加選択の集まりと捉え、そのうえで地理的領域を問題にする必要がある。だが、その場合「圏」という概念が漢人の宗教行為を分析するうえでどれほど重要であるか、分析概念としての有効性は、蓬萊寺の事例を見る限り改めて問題に

する必要があろう。寺廟への参与という行為面ではむしろ、「圏」よりは末成の提案する「公の廟」と「私の廟」との対比が寺廟への実際の関与を把握するうえで有効であり、ネットワークの視点を導入するほうが適切ではないだろうか。

末成は「公の廟」の「公」を「共同の」と捉えて「多勢の人々が積極的に関わっている」と解釈し、「私の廟」の「私」については「廟に関わっている人々の構成が、一部の地域や特定の親族集団に偏っていて、一般性が希薄であることを指示するもの」と述べる（末成、1991：42-44）。管理運営や主要祭典への参加、日常参拝のそれぞれの場合で異なった様相を呈している蓬萊寺は、その両方の側面をあわせ持っている。

蓬萊寺は三邑人によって創建された寺廟であり、先述したように大正半ばまでは三邑人でなければ参拝も寄付もできなかったという。だが、日本の植民地政府の指導のもと、誰でも参拝し寄付することができる寺廟となった。そして日本の統治終了以後は、廟への参拝のレベルでは、玉山にとどまらず台湾北部を中心に全土から多くの信者を集めるようになり、最近では海外からの観光旅行者も随分と多い。これを先の対比で考えた場合、蓬萊寺は「公の廟」と言える。

次に普施（施餓鬼）などの主要祭典の場合、その祭典の中心的な儀礼に正式に参加できるのは主に蓬萊寺を創建した三邑人の子孫であり、台湾各地や海外からの参拝者も含めた多くの日常参拝者は正式な参加者としては排除される。つまりこのレベルでは寺廟の創建の性格が主要祭典への参加者を決めることに少なからず影響し、その点で蓬萊寺は「公の廟」よりは「私の廟」の要素が強くなる。

管理組織の成員では幹部の董監事と結びつきがある人が集められ、つながりに基盤をおく特定集団が構成される。蓬萊寺の管理組織の重要幹部は信仰の厚さや寺廟への貢献がある人間ではなく自分とつながりの深い人間を成員とするため、寺廟管理組織を有力者の派閥形成・権力維持のための一道具としていた。その方向のひとつに三邑人重視がある。三邑人幹部は玉山の都市化に適応するなかで、「当地を牛耳ってきた三姓と三邑人の廟」という幹部成員の意志を蓬萊寺の管理組織の成員選びに反映し、「三邑人」や「三姓人」で

あるという要素（歴史的要素）を台湾でも著名な蓬萊寺に取り入れ、威信の確保に務めてきたと言えよう。

その一方で、玉山よりも広い地域（具体的には台北レベル）の有力者とネットワークを形成する場としても蓬萊寺を利用した。玉山に住む新住民ではなく、三邑人幹部成員とつながりのある玉山以外に住む台北でも著名な人物を取り込んできたのである。彼らの取り込みでは、「地縁」にかわって「同じ信仰」という条件が成員を集める有効な手段となっている。蓬萊寺の董監事選びの事例では、玉山の名望と関係がない人物に対しては、蓬萊寺の董事長の「第一に信仰」という言葉が象徴するように、客観的に確かめる術のない「同じ信仰」によってその選択が正当化されていた。つまり、「同じ信仰」に基づいて、玉山を越えてその名声の広がりに対応する地域から有力者を取り込み、蓬萊寺の名声を高め、ひいては玉山の評判を好ましいものにしようとして試みていた。これは同時に三邑人の幹部成員の個人的なネットワーク資源を拡充する動きであり、蓬萊寺の管理組織は彼らと玉山以外の地域の有力者とを結びつける装置であった。以上二点から、誰が蓬萊寺を管理しているのかという点を見れば、蓬萊寺は「私の廟」に近い。このレベルでは、寺廟管理組織の有力者の意向がその成員選びに強く反映する²²。

つまり、蓬萊寺への関与者の成員権はこのようにまとめられる。日常参拝の外縁は無制限に広がっていながらも、主要祭典の関与者では創建者の出身地域を反映し、核になる管理組織の成員権に関しては寺廟創建の理念を利用しながら、三邑人出身の幹部成員によって閉ざされている。したがって、管理組織の成員や日常参拝を行う信者、主要祭典に正式に関与する信徒になる層が必ずしも重ならない。蓬萊寺は人々の関わりにおいて以上のような三重構造を有し、参加資格が限定されるほど、成員選びに幹部成員の操作性が高くなる。

これらの寺廟と信者らの関係は「祭祀圏」では無論捉えることはできず、各層の成員の偏りも、「祭祀圏」にしる、「信徒圏」にしる地理的範囲である「圏」では捉えられない。一般参拝のレベルは「域」で概念化するにしても、信徒や幹部レベルは少なくとも「私」の意味を考えるためにもネットワークで捉えるほうが漢人の寺廟への信仰をより適切に把握できよう。ここに信仰

の範囲と領域を分析するうえで「圏」ではなく、ネットワークの視点を導入する必要性が存在する。

註

- 1 台北市よりも下位レベルの地名、及び廟名はすべて仮称である。
- 2 未成は20の寺廟の寄付について調べているが、いずれの寺廟の寄付も特定地域の居住者からだけのものではない（未成、1991：50-56）。
- 3 ただ、「圏」と「域」に区分した場合、「祭祀域」、「信者圏」、「信徒圏」との相互関係が問題になる。例えば、祭祀域を超えて信者や信徒がある寺廟に関与してくる場合、「域」と「圏」とがずれる。そこではそのズレを生み出す仕組みを分析する必要が生じる。
- 4 本稿で用いた資料は、1994年9月から1996年5月まで中央研究院民族学研究所訪問学員としての滞在中及び、1997年と1998年の1月の訪問時に得たものである。前者の調査に対しては、財団法人民族学振興会より助成を賜ったことを、ここに記して感謝いたします。
- 5 三邑人の呼称が、出身地の三地域の違いを問題にしていないことからうかがえるように、姓と出身県に特定の結びつきは存在しない。
- 6 当時以来、玉山には風俗産業が集中した一画がある。そのため現在でも玉山と言え、風俗産業を思い浮かべる人も多い。ただし、数年前の台北市政府による取り締まりにより、現在営業している店はほとんどないと聞く。
- 7 1990年現在、外省人（1945年以降、国民党とともに台湾に移り住んだ漢人及びその子孫）が玉山の約15%を占めている。また、本省人（1945年以前から台湾に住む漢人及びその子孫）でも台北以外を本籍とする者が全人口の約半数（1990年現在）を占めており、台北を本籍とする者はわずかに35%に過ぎないのである。この35%も必ずしも玉山出身と考えることはできないため、三邑人は実質的にはさらに少ないと考えられる。
- 8 後述するように現在、参拝においてそのような制限は存在しない。
- 9 調査当時のレートで一元は約四円程度である。
- 10 台湾では寺廟が法人資格を取得する場合、すべて財団法人となる。財団法人は法院（日本の裁判所にほぼ相当する）、つまり国レベルの機関に登録す

る。寺廟を政府機関に登録することによって、税の減免などの優遇処置を受ける。管理委員会は県もしくは市政府に寺廟を登録することによって認可される。

¹¹ 董事長は「お金で信徒になることはできません。なぜなら、お金で信徒になれるのであれば、ご存じのように日本で毒ガスをまいたような宗教の信者が蓬萊寺にお金をたくさん寄付して、信徒になれることになりますから。だから、信徒になるのに寄付の金額は問題にならないのです」と述べた。

¹² 1995年7月11日のインタビューによる。

¹³ 企業名や団体名を挙げればすぐにその人物を特定化することができるため、非常に曖昧な表現とした。

¹⁴ 玉山での三邑人の比率については、註7に詳しく記した。

¹⁵ 蓬萊寺とは別に地域寺廟と認識されている斉天宮の場合であるが、1990年代後半の斉天宮の管理委員では三邑人及び三姓人の比率はそれぞれ45%と22%である。三邑人や三姓人、及び創建と関わる恵安人に委員が蓬萊寺に比べて偏向していないことがその数字からわかる。この数字はいかに蓬萊寺で玉山の歴史が反映されているかを際立たせよう。

¹⁶ 漢人社会の人的結びつきの考察上「感情 (ganqing)」は重要な概念であるが、本稿の事例は十年以上前の事であり、彼らの「感情」についてはほとんど知り得なかった。

¹⁷ それは、彼の一族から彼以外に三名が董監事になり、そのうちの二名は1980年代前半の董事であり、そのなかの一人が後に董事長に就任したことから伺える。

¹⁸ 同じ場（職場や学校など）を共有する者どうしの関係が強い・親密であるとは限らないのは当然である。本章では、「感情がよい」とか「親しい」と語られる関係を複数の紐帯の存在などによって裏付けることを試みた。

¹⁹ 李姓の者は玉山出身であり、台湾貴金属同業会の幹部成員である。彼がどのように選出されたかは不明である。

²⁰ しかしながら、「玉山との関連や名望、信仰心、貢献」の説明が董監事選出の理由として多くの信者らがしばしば語ることを考慮すれば、少なくとも

選出基準について最も受け入れられた決まり文句とは言えよう。決まり文句のそれは、結果的に董監事にどんな人がなっているのかと合致するものであっても、選出メンバーを決定する基準とはなり得ていない。

²¹ ただし、無制限に幹部成員個々人の意向が董監事選出に全て反映されるわけではない。有力者同士の牽制によってその反映は制限されることが実際にあった。

²² 蓬萊寺では董事長等幹部の意向に基づく役員選出を可能たらしめているのは、経済基盤、名声、信徒選出の方法における蓬萊寺固有の性格にある。まず運営基盤であるが、主な収入源は、信者からの寄付、預金利息、不動産収入の三つであるが、利息（年間七千万元）と不動産収入が非常に多く、信者からの寄付に依拠していない。そのため、役員は寄進者の意向をさほど気にせず運営を行うことができる。

次に、知名度が有力役員の意志を反映しやすくしている。先に蓬萊寺は政府やマスコミの注目する公益慈善事業をひろく行っているおり、また海外からの観光客の多さで蓬萊寺の評判が玉山を越えてを広がっている。そのことは、寺廟の社会的威信を形成し、それは董監事になる者にとって多大な魅力となった。故に董監事や信者、筆者の周囲の台湾漢人の大半が蓬萊寺の董監事になることは名誉なことであると考えていた。その上、経済的に安定している蓬萊寺では董監事に必ずしも多額の寄付という見返りが求められない。このように見返りなしに威信を相手に与える蓬萊寺の董監事幹部は、その不均衡な交換のために董監事になることを希望する人々に対して優位な立場となり、彼らの意志を董監事選出により反映しやすいものとなる。

最後に信徒を選ぶ仕組みが関係する。信徒になるためには董監事による審査を通過する必要があるが、既述したように蓬萊寺の信徒資格は曖昧であるため、審査通過は董監事との関係に負うところが大きくなる。つまり通過した人物は董監事に対して人間関係上の負債（「人情債」）を負うことになる。その負債は返済しなければならないものであり、返済できなければ董監事はその信徒に対して蓬萊寺内部で権力を持つことになる。規則上、信徒大会は管理運営するうえで最高機関であり、誰が董監事になるのかを承認する機関

である。だが、信徒と董監事との既述した関係により実質的には董監事会の翼賛機関とならざるを得ない。ここに、機構そのものにおいても董監事の、より厳密に言えば、董監事内部の有力者の意志を反映しやすくするひとつの要因がある。

文献

- 石田浩 (1985) 『台湾漢人村落の社会経済構造』 関西大学出版部
- 岡田謙 (1938) 「臺灣北部村落に於ける祭祀圏」 『民族學研究』 4-1, pp.1-22.
- 木内裕子 (1988) 「境の見えない『村』—台湾漁民社会の事例から—」 『文化人類学』 5 アカデミア出版会、pp.83-99.
- 施振民 (1973) 「祭祀圏与社会組織—彰化平原聚落發展模式的探討論」 『中央研究院民族学研究所集刊』 36 台北、pp.191-208.
- 末成道男 (1991) 「台湾漢族の信仰圏域—北部客家村落の資料を中心として—」 『国立民族学博物館研究報告別冊』 14号、pp.21-101.
- 福武直 (1976) 『福武直著作集 9 中国農村社会の構造』 東京大学出版会
- 三尾裕子 (1991) 「台湾漢人の宗教祭祀と地域社会」 『国立民族学博物館研究報告別冊』 14号、pp.103-134.
- Pasternak, B. (1972) *Kinship and Community in Two Chinese Villages*, Stanford:Stanford University Press.